東日本大震災を乗り越え、学校再開と復興に向けて

１　鳴瀬第二中学校の概要について

本校の前身は、昭和２２年４月に創立された野蒜村立野蒜中学校並びに宮戸村立宮戸中学校である。本校は、昭和３３年９月に昭和の合併で、両校を統合し、鳴瀬町立鳴瀬第二中学校として創立された。そして、平成１７年４月に平成の合併により東松島市立鳴瀬第二中学校と改称された。

学区は東松島市の西部に位置し、東及び北は鳴瀬川と一帯の山地で小野地区に接し、西は松島町と接している。南は石巻湾、西南は松島湾に望む風光明媚な景勝地であった。

野蒜海岸沿いには住宅が建ち、仙台・塩釜・石巻方面への通勤者が多い。また，野蒜海水浴場や宮戸地区海水浴場があり、夏場の観光客も多かった。松島自然の家・縄文歴史資料館・奥松島運動公園などの施設ができ、文教面でも充実していた。

平成２３年３月１１日（金）午後２時４６分三陸沖を震源とするＭ９．０の巨大地震が発生し、そのおよそ４５分後に襲ってきた１０ｍの大津波により、本校の学区である野蒜・宮戸地区は壊滅的な被害を受けた。特に野蒜地区では、５００名以上の方々の尊い命が一瞬にして奪われた。本校は、海水浴場として有名な野蒜海岸から約２００ｍの距離にあったため、体育館、北校舎１階、南校舎は２階教室まで、津波の直撃により大きな損傷を受け、使用不可能となった。学校内の備品等も殆ど破壊もしくは流失してしまい、学校再開への道のりは厳しいものがあった。

平成２３年４月２１日、隣接する鳴瀬第一中学校の校舎を借用して、学校を再開した。しかし、災害救助法等による公的支援だけで学習環境を整えることは、かなり困難な状況にあり、多方面にわたる支援を受け、鳴瀬第二中学校の復興を目指し、全職員が一丸となって教育活動に取り組んでいる。

２　震災発生当日の学校の対応

３月１１日（金）午前中、本校は卒業式であった。卒業式を終了し、３年生が学級活動を終え、全校生徒・教職員が校庭に整列して卒業生を見送ったのは、正午過ぎであった。その後、１・２年生は、部活動をしていた１０名を除き、帰宅した。３年生徒４１名とその保護者３７名は、本校よりさらに１００ｍほど海岸に近い「かんぽの宿」の１階大広間で昼食会をしていた。午後２時頃には校長、３年部教員４名も会場に出向いた。震災発生時の学校とかんぽの宿の状況と対応は、次のとおりである。

（１）学校の状況と対応

○午後２時４６分　地震発生　（　Ｍ９．０　震度６強　）

地震の激しい揺れにより、職員室内の机上の文書等は床に散乱していた。しかし、教頭は地震発生の数分後に、防災無線で大津波警報が発令されたことを把握したので、直ちに二次避難場所である北校舎２階への避難を指示した。南校舎屋上への避難も可能であったが、南校舎が耐震工事をしていなかったことと、北校舎が南校舎より若干高い場所に建っていることにより、本校の二次避難場所は北校舎２階というマニュアルになっていたためである。学校にいた生徒は、部活動をしていたバスケット部の女子生徒１０名と教職員１４名、来校していた業者１名であった。地震発生数分後、教職員は津波襲来に備えて、体育館と校舎内にいた生徒たちを、北校舎２階に誘導し無事に避難させた。１０名の生徒のうち、２名は保護者（母親）が迎えにきたので引き渡したが、後日２名は無事であることを確認した。

その後、教職員は南校舎に戻り、防災無線と乾電池、丸形ストーブ、灯油、ポータブルトイレ（北校舎にはトイレがない）、毛布、布団、枕、医薬品、冷蔵庫にあった食料品、ポット、懐中電灯、乾電池、トイレットペーパー、テッシュペーパー、防寒具等を運び、北校舎での長時間の避難に備えた。

○午後３時４０分頃

１階にいた教職員が校庭を這うように低く流れ込む津波を目撃し、急いで北校舎に避難した。その時、北校舎１階の入り口付近で、松林を倒すバリバリという津波の音を確認したので学校付近を通りかかった３名の地域住民に急いで本校の北校舎に入るように声をかけ、２階に誘導した。

野蒜海岸から迫ってきた大津波に南校舎２階まで直撃された。（後日津波の高さは２階教室の３分の２まで達していることが分かった。）また、南校舎が防潮堤の役割を果たしたことにより、南校舎の両側から回り込んでくるように北校舎に津波が迫ってきた。津波の高さは２階の床上まで達したがベランダのコンクリート塀に守られ、北校舎２階の教室はかろうじて直撃を免れた。また、北校舎の１階入り口を破壊して侵入してきた水は２階に向かう階段を這い上がったが、２階床面の一歩手前で止まった。

北校舎に避難した、教職員１４名、生徒８名、業者１名、避難者３名は北校舎２階の音楽室と視聴覚室に分散していたが、全員無事であった。なお、全職員の車が校地外に流された。校舎周辺の水は夕方になってもなかなか引かず、地面が見える状況ではなかった。視聴覚室に全員が集合し、持ち出したストーブを炊いて暖をとった。また、ラジオで情報収集をした。

教職員の中には、音楽室で周囲の状況を把握したり、午後８時頃に水が引いた１階に降りて状況把握をした者もいたが、最終的には全員が視聴覚室で一夜を過ごした。

（２）かんぽの宿の状況

○午後２時４６分　地震発生　（　Ｍ９．０　震度６強　）

１年時の担任からのビデオレターを上映している時に、突然激しい揺れが起こった。その揺れは数分間続いた。大きな揺れが続いている間はテーブルの下に潜るように指示した。揺れがおさまったところで、支配人から「６ｍの大津波警報が出たので上の階に避難する」という情報を得たので、全員を２階、３階へと避難誘導した。しかし、津波がかなり大きいことが予想されたので、他の宿泊者とともに最上階の４階廊下に移動した。しかし、１０ｍくらいの津波が襲来する可能性があるという情報が入り、４階廊下も危険であるという支配人の判断で、全員屋上に避難した。しかし、屋上にはフェンスがなく、万が一津波が屋上に達した時は危険であると感じた。

○午後３時３０分頃

外は吹雪であり、凍えるような寒さだった。大津波警報が６ｍになったこともあり、支配人の判断で一端４階廊下に戻った。教職員は生徒を廊下に整列させて点呼をとり、余震が続いているが落ち着いて待機するように声をかけた。

○午後３時４０分頃

４階廊下に待機している時に野蒜海岸方面から回り込んでくる大津波を北側の窓から確認した。津波の高さは、２階まで達するほどだった。新町、州崎方面の集落が瞬く間に濁流に呑み込まれてしまった。津波により、電柱も木もなぎ倒され、駐車場の車も流された。家は土台から離れ内陸に向かって流されていった。最初は悲鳴に近い声も聞かれたが、しばらくすると目の前の光景に声を失い、全員が呆然と窓際に立ちすくむだけだった。

パニックで過呼吸になった女子生徒もおり、女性教員がケアした。また、家に残した家族の安否が心配で不安定になる保護者も少なからずいた。中には自宅に残してきた子どもの安否を心配しながら、宿の職員として気丈に避難者の対応をする保護者もいた。なお、依然として携帯電話は全く通じない状況であり、学校、教育委員会との連絡はとれなかった。

○午後４時過ぎ

学校の状況が心配で、校長、Ｓ教諭、M教諭が再度屋上に上がった時、北校舎２階に避難した職員より、全員が無事であることを手の合図で知り安堵した。校長は学校で避難している職員に携帯電話で連絡をとったが通じなかった。周囲の水がなかなか引かないこと、大津波警報が解除されないこと、北校舎に避難した生徒・職員は無事であることが確認されたので、その夜は、かんぼの宿に待機することとした。ラジオからは、１４ｍの高さの津波の襲来が予想されること等が伝えられており、不安な状況が続いていた。

支配人の配慮で生徒たちは、４階の和室に入れてもらった。保護者と教職員は、廊下で一夜を過ごした。日没後、州崎方面に小さな火の手が上がったが、大きく広がることはなかった。余震がひっきりなしに続いた。

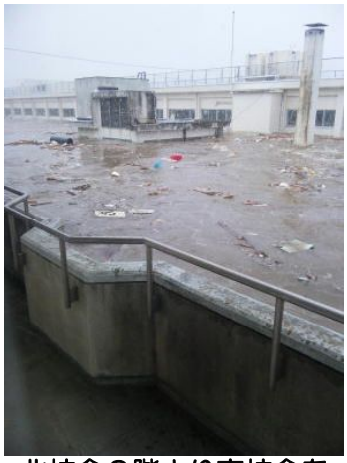
２　学校施設の被害状況について

○南校舎　→　２階のおよそ３分の２の高さまで津波の直撃をうけ、使用不能となった。１階部分の施設・設備は、ほぼ壊滅し、文書等もほぼ全部流出した。２個の耐火金庫は、破壊された校長室の瓦礫の中に埋もれていた。２個を解錠するまでにほぼ１ヶ月を要した。

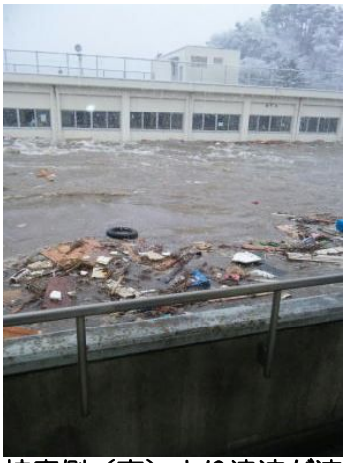
○北校舎　→　１階部分（理科室、技術室）が津波の直撃をうけ、施設・設備はほぼ壊滅し、使用不能となった。２階の３教室（音楽室・視聴覚室・美術室）は、かろうじて無事であった。

○体育館　→　ギャラリー部分まで津波が達し、施設・設備はほぼ壊滅し、使用不能となった。床部分は、下から突き上げる水の勢いで床が大きく湾曲してしまった。

〈　津波襲来時の写真　〉　　※　本校に来校していた写真屋さんが撮影した。



北校舎２階より南校舎を撮影した



校庭側（南）より津波が流れ込んできた

地区全体が津波にのみ込まれた

〈　津波により大きな損傷を受けた校舎の様子　〉

校長室・職員室・保健室の状況

１階普通教室の状況

津波の被害を受けた南校舎の全景

なぎ倒された松が校舎に衝突

南校舎の側面（南西）は陥没して浸水

南校舎２階のコンピューター室の状況

２階の図書室にも津波直撃

２階の西側教室に津波が直撃し窓枠破壊

２階普通教室の状況

北校舎１階の理科室の状況

南校舎から体育館への入り口の状況

午前中に卒業式を終えた体育館を津波直撃

地震発生時刻の２時４６分で
止まった時計

津波の高さはギャラリーまで
達した

演台はフロアーに
松が体育館に流れ込む

南校舎の時計は津波襲来の
直後に止まった

地震発生時刻	午後２時４６分
津波襲来時刻	午後３時４０分
津波の高さ　野蒜下沼	１０．３ｍ
松島自然の家付近	８．５ｍ
宮　戸	８．９ｍ

４　学校再開までの道のり

地域と学校の被害が甚大であり、校舎も使用不可能となった。学校再開までの道のりは厳しいものがあったが、**３月１２日（土）**に野蒜小学校に全職員が集合し、３階教室の一角に臨時職員室を設置した。そして、避難所を巡回して、生徒の安否確認を開始した。**翌１３日（日）**には、未確認生徒を１７名まで絞り込んだが、宮戸地区と野蒜地区を繋いでいる松ヶ島橋が破壊されてしまったので、宮戸地区の情報は正確に把握できなかった。

余震が続いており、津波の直撃を受けて一階部分が大きく損傷した野蒜小学校に４００名以上の避難者を収容しておくことは、危険であると判断した。**３月１４日（月）**夜に避難所のリーダー・班長の方々と避難所の移動について協議した。自宅が流され、家族の安否が確認できない方々も多く、野蒜地区を離れることに難色を示したが、いくつかの条件つきでようやく合意形成した。**翌１５日（火）**に東松島市が手配したバスに分乗し、鳴瀬第一中学校に移動した。教職員も荷物の運搬、教室の清掃と割り当て等の協力をした。３階音楽室に再び臨時職員室を開設して、翌日からの対応について協議した。

鳴瀬二中の南校舎一階にあった職員室、校長室は完全に壊滅しており、校内の設備・文書・パソコン・ＵＳＢ等のデータは全て破壊・流出してしまった。学校の機能回復は困難を極めたが、諦めず、できることから根気強く復旧させることを全職員で確認した。

３月１６日（水）鳴瀬一中に避難している生徒にも協力してもらい、Ｓ教諭が手書きの生徒名簿を完成させた。次に、部活動顧問の連絡網等を集約して、保護者の携帯電話番号の一覧表を完成させた。約７４％の家庭が全流失（全壊）している本校の現状では、携帯電話が唯一の連絡手段であった。今後はその名簿を活用して、生徒の安否確認に全力を尽くすことを確認した。学校の機能回復にとって大きな一歩となった。

３月１９日（土）避難所の巡回と携帯電話網により、在籍生徒数１５６名のうち、東松島市内にいる生徒は５８名、行方不明生徒は３名であることを確認した。残り９８名は東松島市外に避難したものと思われる。また、手書きの学校日誌を作成し、日直の職員が記録することにした。そして、学校日誌を活用して情報の共有化を図ることとした。また、Ｋ教諭が手書きの生徒名簿を自宅に持ち帰り、パソコンで作成し直した。（電気が回復していないので、学校での作業ができなかった。）

３月２０日（日）制服を取り扱っている０商事より、津波の被害を受けた生徒（新入生も含む）に制服を簡便な方法により、無償で支援したいという申し出を受けた。素早い対応に大いに感謝した。後日、社長さんが来校してくれたが、公的支援に任せるべきではないかという社員の意見をはね除け支援に踏み切ったという話を伺った。災害救助法等の公的支援だけで学習環境を整えることができなかった本校への様々な支援のスタートとなった。

３月２１日（月）鳴瀬一中３階教材室に野蒜小学校と共用の臨時職員室を設置した。３回めの移動となったが、教職員一人に生徒用の机を１個ずつをあてがい、自宅から持ち寄ったパソコンで、何とか事務的な仕事ができるようになったことに大きな喜びを感じた。

３月２６日（日）午前１０時から、鳴瀬二中の職員室・校長室の物品回収作業を行った。午後から業者が、耐火金庫の解錠にきたが、１個は何とか開いたが、瓦礫の中に埋まっていた金庫（指導要録を保管していた金庫）については解錠できなかった。午後にようやく野蒜小学校から運んだパソコンが職員用に設置された。これは、学校機能の回復に向けて大きな力となった。

３月２８日（月）教務主任が週報を復活させ、打ち合わせで確認するようになり、午前中に、修了式・離任式についての最終確認をした。市教委が手配した２台のバスで生徒の輸送を行うことを確認した。それぞれのバスに教員がついて乗降の確認をした。宮戸地区については、陸路がなんとか確保できたので、市教委の車で直接送迎してもらった。

午後２時から、鳴瀬一中の武道館で修了式・離任式を開催した。東松島市内に住んでいる生徒たちは、６０名足らずなのに、実際に集まった生徒数は１３３名（在籍数１５６名中）であった。辛く厳しい日々が続いているにも拘わらず、保護者が自力で登校させてくれたのだ。３年生の大部分は制服を着用して出席した。３年生は卒業を祝う会に参加しいたので、制服が流出しなかったこともあるが、多くの生徒が私服であるのに、制服を着用して登校した３年生の姿に胸をうたれた。そして、生徒たちの後方にはたくさんの保護者の姿があった。その光景は胸に迫るものがあった。生徒たちの想い、保護者の方々の想いをしっかり受け止め、学校の果たすべき役割、校長の責務を胸にしっかり刻んだ１日となった。

そして、これまで懸命に働いた教頭以下５名の教職員が転出することになった。兼務発令はだされたものの、４月１日付けの人事異動発令は被災を受けた学校にとってはかなり厳しい現実として立ちはだかった。なお、この日より、手書きの学校日誌から、教務主任がパソコンで作成した学校日誌に記載することにした。

４月４日（月）①「学校再開に向けての実態調査について」と②「被災のため支援を要する学用品の調査」の文書を作成し、各避難所、学区内の自宅にいる生徒に配布した。市外にいる生徒については郵送をした。①の文書で「今後の鳴瀬二中の校舎について」「スクールバスが運行されること」「着任式・始業式・入学式の日程と登校方法について」「制服の無償による支援について」「災害救助法等の公的支援について」「学校給食の再開について」についての周知を図り、学習環境が少しずつ整備されていることについて知らせた。②の調査を実施してまとめたことは、その後の生徒個人へのきめ細かな支援の基礎資料となった。

４月７日（木）　第１回運営委員会と第１回職員会議を実施して、全職員で新年度の校務分掌、行事予定、教育活動の実施計画について確認・協議した。ようやく全職員の新年度体制について共通理解を図り、新しいスタートをきることができた。

４月１２日（火）午前１１時頃から、校長・教頭が鳴瀬二中校舎に出向き、米軍・自衛隊・市教委と鳴瀬二中からの物品回収とそれに伴う瓦礫撤去の作業内容について具体的に打ち合わせをした。午後から、避難所の大部分の方々が南郷体育館に移動した。一部の方々は鳴瀬一中武道館に残った。これまで、ともに避難所で暮らしてきた方々との別れは感慨深いものがあった。子どもたちの学習環境を整えることを優先していただいたことに心から感謝した。大変辛く厳しい状況にありながら、統制のとれた避難所運営により、施設・設備を大切に使ってきた野蒜地区の皆さんは、使用した教室をきれいに掃除し、故郷からさらに遠く離れた地域に移動していった。

４月１３日（水）本校に緊急学校支援員が配置され、打ち合わせで全職員に紹介した。その後１学期末まで配置が継続されたが、学校復旧に向けて献身的に勤務してくれた。また、「鳴瀬一中と鳴瀬二中の使用教室の割り振りの原案」が決まり、「鳴瀬二中校舎から運搬する物品一覧と移動計画案」について全職員で確認した。３階教材室は普通教室となるため、臨時職員室を２階理科室に移転した。実験用机に個人のパソコンを持参しての校務運営となった。スクールバスの運行ルートについて、Ｓ教諭が野蒜小学校と長時間調整し市教委に提出し、後日、ほぼ原案どおり認められた。

４月１４日（木）鳴瀬一中校舎にハウスクリーニング業者が入り、清掃・消臭・除菌作業が行われた。午後１時過ぎから、業者による耐火金庫の解錠が行われた。沿革誌、指導要録等の重要な書類が、ようやく取り出せたが、金庫の中にも泥水が入っており、乾燥と泥落としをする必要があることがわかった。とりあえず、施錠できる北校舎２階の視聴覚室に保管することとした。午後３時半頃から、鳴瀬一中と鳴瀬二中の校長・教頭・教務と話し合いを行い、今後の予定について調整を図った。

４月１７日（日）全職員出勤とし、午前９時～午後４時頃まで、鳴瀬二中からの物品回収作業を行った。陸上自衛隊、米軍に協力要請したところ、約４０名が来校してくれた。統制のとれた力強い動きにより、校舎内の瓦礫は瞬く間に撤去された。米軍の方々とも和やかにコミュニケーションをとりながら作業を進めることができた。鍵つきボックスに入れておいた「横職印」が流出してしまったので、その回収を米軍に依頼したところ、その重要性が伝わり、一生懸命探してくれた。そして、職員玄関・生徒昇降口に圧縮されていた瓦礫の中から回収してくれた。諦めかけていただけに、心から感謝の気持ちを伝えた。

全職員で作業をしたことはその後の協働体制を深めることにもつながった。鳴瀬二中職員室、校長室の瓦礫の中から回収し、校庭に並べられた泥まみれの文書、物品を前にして、失ったものの多さに愕然としたが、とにかく学校再開に必要なものを選別し、鳴瀬一中に運ぶ物品を整理した。机・椅子等の備品については、米軍と自衛隊の方々が手際よく回収し、鳴瀬一中校舎に運搬するものを１階教室に集めた。体育館の校歌板２枚の回収も依頼したが、足場が悪いということで見送られた。数ヶ月後に、ボランテイァの皆さんたちによって取り外してもらい、北校舎２階の美術室に保管することができた。

４月１８日（月）自衛隊・米軍と連絡・調整を図りながら鳴瀬二中から鳴瀬一中への物品の運搬作業を行った。鳴瀬一中の教職員の皆さんが鳴瀬二中の職員室となる１階技術室から作業台を運びだす作業に協力してくれた。全職員で、各教室・職員室の清掃と整備に取り組んだ。午後４時頃、職員室の机が搬入され、組み立て作業を行った。ようやく技術室が職員室兼校長室としての形が整った。野蒜小学校に設置した臨時職員室から数えると５回目の職員室移動となった。

４月１９日（火）職員室を整備し、ようやく入学式・新学期の準備を再開することができた。職員室の移転が続き、その機能回復にも時間がかかったが、２日後に新年度のスタートに向けて、できることに精一杯取り組み生徒たちを迎えたいと決意を新たにした。

また、徳島県教育委員会の方々が来校され、鳴瀬二中北校舎で、泥水につかっていた指導要録の泥落としに、２日間にわたって丁寧に取り組んでいただき、指導要録を復活させることができた。

午後１時３０分から、鳴瀬一中と鳴瀬二中の全職員の顔合わせ会を行った。長期間にわたって間借りしなければならない状況について確認することができた。また、午後２時３０分から、部活動の顧問の打ち合わせ、教科部会等を行い、教職員間の連携を図った。

４月２１日（木）午後２時から、鳴瀬一中体育館で、着任式・始業式を実施した。教頭以下５名の教職員が転入してきた。震災から４１日が経過しており、例年より１０日遅れの始業式となったが、制服を着ている生徒よりも、私服の生徒が多かった。鳴瀬一中の体育館にしっかり整列をした生徒の姿を前にし、生徒たちの置かれている現実の厳しさを突きつけられ、胸がつまった。しかし、とにかく元気な生徒たちの姿に会えたことと鳴瀬一中の校舎で新しい学校生活がスタートできることに全職員・生徒とともに感謝した。また、上靴は、当日全生徒に無償で支給することができたが、教科書、運動着、学用品等についてもできるだけ早く準備するので、焦らず少しずつ前に進んでいくよう励ました。新２年生は４１名（特別支援学級生徒２名を含む）なので１学級編制、新３年生は５２名　なので２学級編制でスタートした。

４月２２日（金）午後２時から、鳴瀬一中体育館で入学式を実施した。午後１時過ぎから、鳴瀬一中校長室を来賓控え室として借用し、地域の来賓の方々を待った。野蒜地区の来賓の方々の大部分は自宅をなくし、他市町村に住んでおられた。中には、津波の犠牲になられた方やご家族を失った方々も多かった。案内状はお届けしたが、参列していただける方がどのくらいになるか予想がつかなかった。しかし、開式の３０分以上前から鳴瀬一中の玄関にたくさんの方々がどんどん集まってこられた。校長室は瞬く間に一杯になり、椅子が足りなくなるくらいだった。震災以来、初めて再会する方々もおられ、握手をしたり、抱き合いながら互いの状況を確認されている姿に思わず目頭が熱くなった。「地域の学校によせる期待」「地域の学校であることの使命」を強く自覚した一瞬だった。最終的には４２名の方々が来校された、入学生４０名より多い人数となった。

また、航空自衛隊立川基地の音楽隊の方々にご来校いただき、入場曲、校歌、「ありがとう」の三曲を演奏していただいた。素晴らしい演奏に合わせて歌った「校歌」は会場の生徒・教職員・保護者・地域の声を一つにし、会場一杯を満たした。目頭を押さえている方々も多く、「ありがとう」の演奏にも大いに勇気づけらた。担任の呼名に元気な声で応える生徒たちの姿は誇らしげで自信に満ちていた。そして最後に笑顔で撮影した記念写真で新しい学校生活をスタートさせることができた。学校再開に向けて、休みなく職務に取り組んできた全職員も、新しい１年の始まりと新たな希望の光を見いだすことができた一日であった。

５　学校復興に向けての主な取り組み

震災により、本校の学区である宮戸地区、野蒜地区は壊滅的な被害を受けた。津波の直撃により校舎は甚大な損傷を受け、使用不能となった。校舎内の全てを失った喪失感は極めて大きいものがあった。全壊（全流出）の家庭が７４％、大規模半壊・半壊が１２％であった。その大部分が仮設住宅や借り上げアパートから７コース８台のスクールバスで通学している。何とか鳴瀬第一中学校の校舎に間借りして学校を再開することができたが、与えられた環境の下、生徒や保護者に少しでも安心感を与える学習環境の整備と、復興への原動力を高め、新たな希望の光を見いだし前進させることが大きな学校課題となった。

しかし、学校再開の時、４０名以上の地域の方々に来校いただいたことは大きな支えとなった。その背景には自力で案内状を配布してくれた教職員の頑張りと学校復興に向けての想いがあった。

また、これまで支援をいただいた個人・団体は１２０ヶ所であり、支援者の方々からいただいた名刺は２１０枚以上に達した。震災直後、災害救助法等の公的支援には限界があり、生徒の学習環境を迅速に整えるためには、全国からの温かな支援が不可欠であり大きな支えとなった。これらの支援は相手方から、申し出を受けることが多かったが、教育活動を充実させるための物品を調達するには、学校から働きかけて支援していただくことにも積極的に取り組んだ。そして、支援者の方々に対してはできるだけ丁寧に対応し、支援を受けた後は、時間をおかずに御礼状を差し上げるよう努めている。最近は、「学校の被害状況」や「学校だより」を同封し、できるだけ学校の様子をお知らせするように努めている。

そして、支援を受けることを当たり前と考えるのではなく、たくさんの方々の温かな想いの結晶が学校に届けられているのだということを折に触れて生徒たちにも伝えている。物質的な豊かさを求めるのではなく心の豊かさを育てること、将来は「地域を支える大人」「社会人としてしっかり生き抜く大人」に成長させることが、教育の使命であり、受けた支援を次世代に引き継ぐことにもなるのではないかと考える。

震災から、１年が経過したが、 失ったものを根気強く取り戻すとともに、「地域の学校」であるという想いを全職員で共有し、日々の教育活動の充実させ、保護者・地域との連携を深めながら、「鳴瀬二中の復興」を目指してきた。

４月の学校再開の時には、厳しい現実を前にして、先の見通しをたてることも難しかったが、諦めず、根気強く、日々の教育活動に取り組み、その成果を高め、生徒に自信と誇りをもたせるように全職員が一丸となって実践を重ねてきた。そして、それを学校だより等を通して、保護者・地域への情報発信に努め、校舎はなくなっても学校がなくなったわけではないということを学校・保護者・地域が連携しながら確認してきた。

（１）「地域復興祈念親子大運動会」に２５０名の来校者！

震災から１６９日目にあたる、**８月２７日（土）**鳴瀬一中校庭を借用し、「地域復興祈念大会」と銘打った親子大運動会を開催した。

平成４年度に「体育祭」から「親子大運動会」に改めて、今年で１９回目を迎える行事である。今年は、地域の方々の再会の場としたいという想いを実現するため、例年通りの地区毎テント１２張を何とか調達した。

また、**「Let's run　～走れば見える復興というゴール～」**をテーマに掲げ、夏休み前から、生徒会と実行委員会が企画に取り組んだ。そして、「生徒会長と実行委員長が震災を乗り越え生き延びたサラブレットにまたがって入場する」「火の神が奥松島縄文の村の火興し器で火種をつくり、希望の火をトーチに点火し、地域の方々にも参加してもらい、聖火台までリレーでつなぐ」等の企画により、感動的な開会式となった。聖火台に点火した火は高々と燃え上がり、会場から大きな拍手がわき上がった。そして、「地域復興への想い」「鳴瀬二中復興への想い」を会場全体で共有することができた。

また、本校恒例の出し物である、男子生徒による「エジプトダンス」、女子生徒による「民謡踊り」もたくさんのご支援をいただき、完全復活することができた。そして、宮城教育大学の皆様にも当日の運営に協力をいただいた。その調査によると最大で２５０名もの来校者があったことがわかった。

（２）「文化祭」に希望の光を継承！

震災から２１９日目にあたる**１０月１６日（日）、「Best Smile　～輝けみんなの最高の笑顔～」**をテーマに掲げ、本校恒例の文化祭を鳴瀬一中体育館を借用して開催した。オープニングセレモニーの後，学年合唱、全校合唱（「ふるさと」を合唱）で幕開けし、各教科の学習成果の発表、各学年企画の舞台発表を披露した。今年は「展示」「舞台」ともに学年企画とし、体育館での発表としたが、短時間に能率良く鑑賞できた。

舞台では、「松童太鼓の演奏」「朗読劇」「ビデオ劇」を、展示では「鳴瀬二中のモザイク壁画」や各学級で制作した「壁新聞」等を披露した。練習時間や練習場所の制約があったが、生徒たちは心を合わせ精一杯取り組んだ。また、今年は平成２１年度卒業生が特別出演し、「君と見た海」を素晴らしい歌声で熱唱してくれた。卒業生の真剣な想いの込められたメッセージと歌声に会場は感動の渦に包み込まれた。また、ＰＴＡの方々の協力により、恒例の「食品バザー」も何とか復活することができた。

２年展示発表モザイク壁画
『鳴瀬二中校舎』

１年舞台発表『松童太鼓』

３学年合唱

火の神継承式

平成２１年度卒業生合唱「君と見た海」

６　今後に向けて

学校は少しずつ、元気と自信を取り戻してきたが、地域と学校の根本的課題は解決されていない。被災した地域においては、例外なく学校の再編問題が浮上している。学校の統廃合は地域の存続にも関わる重大な課題である。今回の震災において、地域が壊滅的な被害を受けているにも拘わらず、人的被害が小さかった地区があった。それらの地域は例外なく、地域のコミュニテイーがしっかりしており、日頃の連携がとれている地域であった。明治以来、学校は地域の中で歴史を刻んできた。地域がなければ、学校は存続できない。同時に地域のコミュニティの基盤となるのは学校であることを、ここ数ヶ月の教育活動を通してさらに実感させられた。今後も公教育を担う上での制約や規制を踏まえながらも、自律的で責任ある学校経営をしていきたい。そして、生徒に自信と誇りをもたせ、明日に向かって前進させる教育活動を推進していきたい。